



THINK × ACT  
KANSAI  
UNIVERSITY

---

# 教職支援センター一年報

---

# 2011

関西大学 教育推進部  
教職支援センター

## 『教職支援センター一年報 2011』目次

教職支援センター一年報の発行に寄せて	教職支援センター長	山本 登朗	1
国際社会で生きる子どもの育みと教員の海外での教育活動経験			
	特任教授	竹内 啓三	2
「打たれればキャッチャーの責任、・・・」	特任教授	辻本 修一	4
子どもと共に学び、誇りを持って実践できる先生への夢			
教員志望者を全力で支援します！	教職アドバイザー	藤井喜代美	6
東日本大震災以降、考えていること—自分を鍛えるボランティア活動—			
	教職アドバイザー	尾島 重明	8
投稿原稿			
歴史学の観点から見た大学での歴史科教育学の意義	非常勤講師	比佐 篤	10
実践的指導力の養成と“教育原理”	非常勤講師	上田 浩史	16
報告 地理歴史科教育法における模擬授業の実践から	非常勤講師	高橋 陽子	22
教師受難の時代に教職を志す皆さんへ——中学校教育が危機——			
	非常勤講師	服部 千秋	28
3年次生対象教育実習ガイダンス記録			34
教員採用試験合格者との情報交換会			52
各キャンパスにおける教職相談			65
千里山キャンパスにおける教職支援内容			67
教職支援センター中期行動計画			68
教員免許状更新講習について			70
<b>〈統計・データ関係〉</b>			
各学部・大学院で取得できる免許状の種類・教科			72
介護等体験参加者数			74
教育実習生数			75
教育実習出向指導校一覧			76
教員免許状取得状況			78
教員採用試験合格者数			84
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果			87
教職に関する専門教育科目担任者一覧			88
<b>〈その他〉</b>			
講演会関連資料（理数科の教員をめざそう）			93
本学卒業新任教員との情報交換会			98
教職専門科目担当者研究会			99
教員採用試験合格者壮行会			102
教職実践演習新設に伴う自己評価シート			103
<b>〈委員会関係〉</b>			
教職支援センター委員会委員名簿			104
<b>〈規程等〉</b>			
教員養成のための豊能地区3市2町教育委員会との連携協力に関する協定			106
教職支援センター一年報 投稿規程・執筆要領			107
教職支援センター規程			109

## 教師受難の時代に教職を志す皆さんへ——中学校教育が危機——

関西大学非常勤講師 服部 千秋

- 目次
- 1 中学校の様子
  - 2 学校現場を見るための着眼点
  - 3 教育現場の対応の様子
  - 4 あなたがよい教師になるためには  
——「幅広い人間性で生徒指導ができる教師」、  
これが求められる教師の姿です——

### 1 中学校の様子

最近、A町の学校教育の現場がうまくいっていないことが、教育委員会から地元議員たちに、また中学校から保護者たちに報告がありました。正直に言ってもらっている姿はよいことですが、この現状に対して、教育委員会も、学校も、議員も、保護者も一緒になって考えなければなりません。学校の教師だけですべてに対応できない部分があるからです。子どもたちを取り巻く環境は、20年、30年前とはかなり違ってきています。皆さんが教師になられた場合にも、年を経るにつれて、生徒の様子は皆さんが生徒のときと変わっていきます。昨今、教師をとりまく社会環境もかなりかわってきました。教師にとって厳しい時代となってきました。学校の問題のすべてについて教師だけを責める訳にもいきませんが、教職を志す皆さんは、どのような時代になっても、教師が果たす役割は大きく、またそうであるがゆえに、教師に対する期待も、風当たりも強いものがあるということを十分肝に銘じてこの職業を選んでもらいたいと思います。

教師を目指している学生の皆さんに、教師経験者として、また最近学校を視察したりして（それが一地域であるものの）現場の状況を把握している者として、学校現場の様子について考えてもらうための材料を提供したいと思い本稿を書きました。最近の教育をとりまく現状は極めて厳しいものがあり、単に教師の収入が安定しているなどの理由だけでは、この職業を選ぶことはできないということを知ってもらいたい。そして教師になるときに心がけてもらいたい点について述べることにします。小学校、中学校、高校によって、それぞれの特徴が学校教育の中で見られますが、本稿は、ある意味、生徒指導ができるかどうか、他にも増してその教育を大きく左右すると思われる中学校に焦点を当てて述べることにします。

A町で生徒が教師の指導に従わなかったり、非常に興奮したり、騒いだりして、スムーズに学校教育ができない事態が続いて発生しています。生徒同士の暴力的なトラブルや、教師に対する暴力があり、警察までもが学校に来て、生徒が警察まで連れていかれるということがあつ

たため、学校は年間に計画している数日のオープンスクールとは別に、急きょ、期間を設けずに当面の期間をオープンスクールにし、現在いつでも地域の方々がその中学校に入って学校の現状を見ることができるようになっています。教育委員会の管理職に「学校見に行つてよ。」と言われ、筆者も地域の一人として学校に行き、教室をまわり、実態を体験することになりました。教室の訪問に対して、帰りに廊下で先生方から「ありがとうございました。」と感謝されることになりました。

筆者が見た教室の状況は、教科書を出していない生徒が3名程いるクラス、机の上には何も置いておらず横を向いている生徒がいるクラス、教師が生徒を掌握しているとは言い難いクラス、授業になっていないクラスなどでした。7～8つの教室に入りましたが、そのうち半分のクラスで、教室に入るやいなや、「どちらさんですか。」と後ろの席にいる生徒が筆者に問う状況で、唾然として帰ってきました。授業中は、机は前向き、体は横向き、教科書なしの生徒が、先程筆者が参観した授業を担当されていた女性教師と廊下で話しているときに「先生の旦那さん？」と、その女性教師をからかって通り過ぎていきました。しかし、教師にちょっかいを出して通り過ぎて行った訳ですから、そういう意味では大人から見ると、かわいいものでありました。なぜ、こういう生徒を掌握できない現状があるのでしょうか。

このような状況は、特定の中学校に限られたことでしょうか。そうではありません。A町に隣接する自治体の主婦の方と話していたときにも、「うちの近くでも同じようなことがあり、教師の注意に生徒が知らぬ顔であったり、また教師が注意しない。あのような学校には行かせたくないと思い、新しくできた小中一貫校の学区（通常の通学区でなく研究校として先進的に設置された小中一貫の学区がありました。）に子どもをやった。」とのことでした。また私は学習塾でも教えてきた経験をもっていますが、塾の生徒の話によると、ここまでの状態でなくても、同じようなことがあるということを経験して聞かされてきました。いわく、「学校では授業になっていないので寝ている。」その生徒は塾ではきわめてまじめな生徒でした。また親もまじめな方でした。

中学校が危機。つまり、日本全国、程度の差はあれ、同じようなことが、多くの中学校で起こっている可能性があり、学生の皆さんは将来、このような中へ入っていくということを十分肝に銘じて、教師という職業を考えてほしいと思います。教師を志す理由は様々でしょうが、子どもたちを教えたいと言う気持ちが、単にそう思うだけなのか、また使命感に燃えてのものなのか。いったん教師になると、厳しい現実と直面することになります。しかし、これは民間企業とて厳しいということについては内容は違っていても同じことであり、教師を志している皆さんだけが社会に出て厳しい場面に出くわすわけではありません。筆者は、皆さんに教師を諦めるようにと言っているのではなく、現実を知ってほしいという意味で、あえて本稿を書いていることを理解してください。

このような学校においては、全教師が、みずから体を張って仕事をする気概があるかどうかということが、生徒の心に届くものです。生徒の前に複数の教師が皆で正々堂々と立っている

とき、その姿に生徒の心は教師の思いを感じとります。生徒は教師がどういう姿勢で自分たちの前に立っているのかを、肌で、あるいは直感で感じます。時には、教師の心の中を探りながら行動をとっていると言っても過言ではありません。したがって、教師の気持ちの中に「教師が注意したことに対して、言うことをきいても、聞かなくてもどちらでもいいや。」という思いがよぎったとき、生徒はそれを敏感に読み取り、あなたの生徒指導はうまくいかなくなり、当然、教科（学習）指導（授業）もうまく進めることができなくなるのです。私も過去に現場の教師であったので、教師を責めたくありませんが、教師として生徒の前に立つときの姿勢については、少しばかり先輩の教師経験者として、現場の教師を叱咤激励したくなるのが最近よくあるのです。訪問した中学校で、筆者はその学校の教師ではありませんが、自分の席についていない生徒を少し注意してみました。一回目優しい声で。言うことをききません。二回目厳しく。その生徒は自分の席に戻りました。（本当は3回目に厳しく言うのが筆者のやり方ですが、そのときは多くの教室を見なければならなかったため2回目に厳しく言いました。）わかりやすく言えば、「殴るなら殴ってみろ。君のことを考えて言っているのだ。」と心の中で思って、生徒の前に立つとき、生徒はその気迫に教師の思いを感じるのです。

別の中学校の管理職と話していたとき、注意する生徒がクラスに1～2名いるだけのときはいいが、数が増えてしまうと、『もぐらたたき』になる、という表現をしました。ことばがいかどうかは別として、「あちらに注意しても、こちらで注意しなければならない。注意すべき生徒がどんどん生じ、延々と注意しなければならないクラスの状態」を筆者に対してそう表現してくれたのでした。このような状態になったとき、この教師の使うエネルギーは大変なものになり、教師はそのうち疲れ果ててしまうこととなります。

一方、若い教師を育てる任務は、現場の管理職にあります。よい上司に恵まれることは、皆さんが学校現場に入ったときに大切なこととなります。親の前や公的な場面においては管理職は言えないことばですが、筆者と個別に話しているときには「やめさせたい教師がいる。」ということばを言った管理職がいます。その数が一人という状況ではないようでした。「仕事を任すことのできる教師に対しては仕事を任せるため、教師の仕事量がアンバランスになってしまう。」と漏らしていました。（もちろん公の席では、「教師が互いが職務を分担しあいながら、子どもたちの教育に全力を尽くしています。」と全ての管理職が言うことは当然のことではありますが。）公立学校の教師はほとんどの場合免職になることはありません。ですから、皆さんが教師になったときに、自らの役割と職責を本当に理解して教育活動にあたってくれることは、現場において非常に助かることとなるのです。ですから、『教師の仕事はお金では割り切れない』のです。身分を保障されているのですから、その分、地域のために、保護者のために、そして何よりも生徒のために仕事をしてもらわなければならないのです。「大学卒業後教師になって50歳台になっても一度も担任をもたせてもらえない教員が実際にいる。」と、その管理職が話していました。

## 2 学校現場を見るための着眼点

教育では教科（学習）指導、生徒指導ということばが使われることがよくあります。学校の目的の大きな部分は教科（学習）指導であることはもちろんですが、実際には、中学校では生徒指導の方が、教科（学習）を指導する基本になるため、きわめて重要であると言っても過言ではありません。わかりやすい表現をすると、生徒指導のできない教師は教科指導ができないということです。いくら皆さんに学力があっても、生徒を掌握し、学習面以外の生徒の心理状態も見ながら授業できる力量がなければ、よい授業はできません。ですから、生徒指導ができているかどうかは、よい教師、よい学校であるかどうかの基本であるということです。この生徒指導ということばは、必ずしも生徒を叱って言うことを聞かせるということだけを意味するものではありません。生徒は恐怖心から教師の言うことを聞く場合もありますが、生徒が納得の上で教師の言うことを聞くように教師は指導・訓育しなければなりません。そして生徒が精神的にも発達段階にあることを考えながら、カウンセリングマインド<sup>(注1)</sup>をもって、生徒の心を受け入れながら指導しなければなりません。こうすることで生徒が育つのです。これは教師の指導に従う生徒にも、従わない生徒にも同じようにしなければなりません。

ここで生徒指導が学校として機能しているかどうかの着眼点についていくつか述べます。（紙面の都合ですべては書けません。）

- (1) 学習指導が十分なされるような教室の雰囲気か。授業中に生徒が立ち歩いたり、教室から生徒が出て行くことはないか。
- (2) 教育現場が組織として生徒をしっかり叱るなど、生徒指導は十分機能しているか。
- (3) いじめ、不登校がどの程度あるか。また、いじめに関する報告などを教師間で共通認識できているか。問題行動への対応を教師間で話し合っているか。
- (4) 学校は、また担任は、生徒の学校での問題行動について保護者に日ごろから知らせ、保護者とのコミュニケーションを十分とっているか。
- (5) 地域の人たちが学校に目をやり、協力的な姿勢で学校を見ていくような状況を学校として作り出しているか。学校評議員の制度など<sup>(注2)</sup>が現在とられています。これだけではさまざまな親の状況に対応できない場合があると筆者は思います。学校が困難な状況にあるときに地域が助けてくれる状況を日頃から学校としてつくっているか。例えば、驚くことかもしれませんが、教員の中には外からのお客さんに会釈をできない人がいるのです。残念ながら事実です。数年前に筆者はオープンスクールで、廊下ですれちがうすべての教師に会釈をしましたが、筆者が会釈しても半分の教師しか会釈をしませんでした。（教育長や教育委員会管理職と話をし、今はその学校の様子は変わっていますが。）教師は社会人としても日頃から成長しておく必要があるのです。学校、家庭、地域のきずなを強化する一つとして、最近各地でオープンスクールがなされていますが、形式的なものになっていないか。また、学校がお手上げだから外に頼むということになってはいけません。
- (6) 教職員のメンタルヘルス対策はどのように行っているか。せつかく教育したいという気持ちをもって教師になった人たちを、先に教師になった者は育てていかなければなりません。そのための方策を管理職はどのように考えているか。

- (7) 最近の教員採用に面接を重視していることは知っていますが、それでも採用されるには学力が必要です。勉強を頑張っただけで採用された方に、学力以外の経験が生徒を指導する際にきわめて必要な部分があります。学力以外の幅広い人間性を大学卒業までに、できる限りつけておくことが重要です。そして教師になってからもその努力は続けなければなりません。

### 3 教育現場の対応の様子

では実際に学校現場ではどのように対応しているかについて述べます。2の「学校現場を見るための着眼点」について、教育行政にたずさわる当局（教育委員会）に尋ねた結果をまとめると以下の通りです。（紙面の都合ですべては書けません。）

- (1) 大多数の生徒は意欲を持って勉強や運動に取り組んでいるが、生徒によっては、生活の乱れや規範意識の低下から授業に集中できなかつたり、反社会的行動を繰り返している実態がある。
- (2) 教師は全員が話し合い、共通理解のもとで生徒同士、生徒と教師、教師と保護者、教師と関係機関等が、関わり、つながることを大切にしながら、組織的な指導を進めようとしている。絶対にあきらめない、強い覚悟を持って取り組もうとしている。
- (3) いじめ、不登校の調査方法は日ごろの観察、保護者からの訴えや生徒間の情報、教育相談、生活記録ノート、生活アンケートにより実態把握に努めている。A町（4小学校、2中学校）においては、いじめの件数については、昨年度は5件。今年度は現在のところ報告なし。不登校については、昨年度小学校3名、中学校24名で計27名。本年度10月現在で小学校2名、中学校14名の計16名ということであった。
- (4) 学校は保護者とのコミュニケーションを電話での連絡により機会あるごとに行い、保護者と共通認識が持てるよう努めている。ただ、現実として自分の子に指導できない保護者もいる現実があるとの答えであった。
- (5) 公立の義務教育学校では、ありのままの社会や家庭を受け入れて成り立っており、教育機関として多くの力を結集して児童・生徒の成長を見守り、つながることで課題解決に向かっていきたいとのことであった。困難な状況にあるときこそ、問題のある生徒にも、問題のない生徒にも、関わることを忘れずに指導を行っていくことが大切であるとのことであった。家庭、学校、地域のきずなについて、オープンスクールの取り組みは、困難な状況にあるときこそ、風通しをよくし、情報を正しく伝えるための施策であるとのことであった。幼稚園と小学校、小学校と中学校の連携は重要な課題であり、今後は、中1ギャップ<sup>(注3)</sup>の問題研究を進めていくことも重要であるとのことであった。幼少、小中の連絡会を開催し、幼稚園、小学校、中学校それぞれの教師のつながりと関わり、解決すべき課題の取り組みに生かす試みを行うとのことであった。（A町ではないが小中連携については、実際にB市では小中一貫の教育を開始し、数年後に完了させる予定である。この場合、教科を限定して小学校教諭と中学校教諭が相互乗り入れのかたちをとっている。）
- (6) 教職員のメンタルヘルスの対策について最も大切なことは、問題等が発生したときに

絶対に一人で抱え込まず、組織で対応することが大切であるとの答えであった。(実際、学校現場に配置されているカウンセラーは、生徒のカウンセリングだけでなく教師の相談にも相当数のっています。兵庫県教育委員会はメンタルヘルス通信を教職員に配付し、啓発や学習を進めています。)

- (7) 若い教師をどのように育てていくべきかについては、教育現場の抱える課題は増加し、困難さを増しており、生徒だけではなく保護者対応の難しさもあり、人間力の向上、カウンセリングマインドとともに、伝えることのスキルアップを図ることが重要であるとの答えしか返ってこなかった。

#### 4 あなたがよい教師になるためには

##### ——「幅広い人間性で生徒指導ができる教師」、これが求められる姿です——

皆さんは学問を修めて教師になる訳ですが、学問以外の人間性にそれぞれ幅があるかどうか。実際に教師を続けていくときに、そのことが大きな役割を果たします。勉強においても、クラブにおいても、人間関係においても、また生徒と教師の人間関係においても、子どもたちが成長することのできる教師になること、「幅広い人間性で生徒指導ができる教師」、これが現在の学校教育で求められる教師の姿です。皆さんが高い志をもって、日本の将来を担う子どもたちを教育してくれること、ひいては日本の将来を皆さんが創り出だすという高貴な職業に就かれることに対して敬意を表します。いつまでもその高い志をもち続けて教師の仕事をしていくことを祈ります。

---

(注1) カウンセリングマインド … 臨床心理学者カール・ロジャーズ (Rogers, C. R. 1902～1987) の来談者中心療法を基礎とする相手へ接するときの心の持ち方。相談にのっている相手(来談者)の物の見方や受け止め方があるがままに受け止め、それを相手に返して(映し出して)いくなかで、相手が解決策を自分で生み出していくとする心理療法の考え方。良い悪いの判断を超えて、児童・生徒の考え方をあるがままに受け止め、それを返して(映し出して)あげ、本人が考えるよう接していくことがこの考え方のポイントです。

(注2) 学校評議員の制度 … 中央教育審議会の答申「今後の地方教育行政の在り方について」(平成10年)を踏まえて、学校教育法施行規則が改正され(平成12年)実施されている制度。校長の推薦により、学校の設置者(市町村などの教育委員会)が学校評議員を委嘱。学校評議員は校長の求めに応じて、学校運営に関して意見を述べます。A町では幼稚園3名、小学校6名、中学校8名の学校評議員がおり、各校年間2回程度開催されています。

(注3) 中1ギャップ … 小学生から中学生になったときに中学校での生活(学業や生活リズム、人間関係など)になじめない生徒がいる現象。そのようなことを少しでも減らさせる目的で、小学生と中学生が一緒に行事をしたり、中学校の教師が小学校に行って授業をしたりする取り組みが全国的に行なわれるようになってきています。